

超教育協会設立シンポジウム レポート1

小宮山宏超教育会長・野田聖子総務大臣あいさつ



2018年5月29日、慶應義塾大学三田キャンパスにて超教育協会設立シンポジウムを行いました。当日は下記プログラムで進行し、超満員300名以上の方々にお越しいただきました。第一弾レポートでは、超教育会長小宮山宏氏、野田聖子総務大臣からのご挨拶をご紹介します。

プログラム

1 超教育協会会長挨拶

小宮山宏 株式会社三菱総合研究所理事長、東京大学第28代総長

2 来賓挨拶

野田聖子 総務大臣

住田孝之 内閣府知的財産戦略推進事務局長／超教育協会オブザーバー

八山幸司 内閣官房IT総合戦略室参事官／超教育協会オブザーバー

3 基調講演

柳沢幸雄 開成中学校・高等学校校長、東京大学名誉教授、元ハーバード大学大学院教授／超教育協会評議員

4 団体活動紹介

石戸奈々子 超教育協会理事長

5 議論

杉山知之／デジタルハリウッド大学学長

安宅和人／ヤフー株式会社チーフストラテジーオフィサー

藤原洋 / 超教育協会幹事

中村伊知哉 慶應義塾大学教授、DiTT専務理事／超教育協会幹事・理事

(敬称略)

超教育協会会長挨拶

小宮山宏 株式会社三菱総合研究所理事長、東京大学第28代総長

「超教育」をひもとく3つの視点



皆さんこんにちは。超教育協会っていったい何だろうと思って、集まっていたのだらうと思います。こんなにたくさん来ていただけると思いませんでしたので、会場の選定を誤りまして、少し小さい会場を選びすぎました。お断りしたりして大変申し訳ございません。「超教育」というのをご理解いただくためには、3つの視点がございます。ひとつは「IT人材の育成」というキーワード。もうひとつは日本の特徴や有利な点から考える「超教育」。3つめは、「超教育社会」とはいったい何なのか？ということ。これら3つの視点を順番にご説明したいと思います。

ベースリテラシーとしてのIT

まず、IT人材の育成です。これは言うまでもないのですが、いわゆる読み書きそろばん、国語・算数・理科・社会のように、ITはリテラシーのベースになっていきます。ところが、日本は、IT教育に関して後進国になってしまっています。学校以外の、社会を見てもそうでしょう。世界では、再生可能エネルギーの普及が信じられないくらい速いのに、日本は遅れているなど、世界に比べて普及が劣っている、さまざまな面があります。ここらへんは実はみんな相互に関係していて、ITはベースのリテラシーとなっていく必要があるんです。

そして、今、人生100年の時代とも言われていますが、リカレント教育が重要です。私は、これまでDiTT（デジタル教科書協議会）で活動してきましたが、ようやく、国が動きはじめました。しかし、これもまた完全に遅きに失している。この分野は、民間が引っ張っていかないと日本はどうしようもなくなってしまうと危惧しています。「民間主導でやっぺいこう」というのは、超教育においても重要なポイントです。民間が主導して、ITの使える人材を育成していきましょう。これが超教育を考えるための、第一の視点です。

IT・AIを活用する余地をまだまだ持つ日本社会

第二の視点は、今の日本の特徴である、就職がものすごくいいということです。逆にいうと、労働力不足とも言われています。今は、15歳～64歳が労働生産人口とされていますが、事実をみるとどうか。15歳から18歳というのは中学3年生から高校3年生や大学1年生。働いていないですよ。高等学校を卒業してすぐに働き始める人は、昨年日本では17パーセントしかいませんでした。先進国基準で労働力人口と言ったら、大体20歳以上です。私は今73歳ですが、まだまだやれます。私の友人たちに、ゴルフをやろうと誘ったら、「エベレストでトレッキングに行ってくるから帰ってからにしよう」と言われます。クラスメイトだから大体同じ年齢です。皆さんは、そういう人たちに年金を払っているわけです。つまり、今の社会の制度が間違っているのだと私は考えます。実態が変わっているのに、制度が変わっていない。例えば、20歳～74歳が労働生産人口という社会に変えて、ITやAIを導入して生産性を上げていくことができれば、今議論している問題の相当部分が問題じゃなくなってしまいます。IT、AIをどんどん導入しても、雇用などの問題が量的にはおきない。これは、他の国にあまりない、ほとんど世界で例を見ない有利な点です。

人生100年時代は、「超教育社会」へ

それから3つ目の、いよいよ、「超教育社会」というのは何か？という話です。今の学校制度は人生が50年や60年で終わる時代にできたものです。実は、最初に定年制度が生まれたのが昭和25年頃で、定年は50歳でした。ところが、当時の平均寿命は50歳にもいっていませんでした。戦争の影響というのがありますが、何しろ1900年の世界の平均寿命は31歳ですからね。その後、平均寿命がどんどん伸びてきて、今世界の平均寿命は72歳です。日本だけが特殊というわけではなく、みんな長生きできるようになってきました。

そして、人生100年時代。今年生まれた子どもたちは、百まで生きると言われています。そんな時代にありえないじゃないですか。小学校に入り、大学を卒業するまで勉強し、その後はずっと同じ企業で働く。そんなこと、今の学生は考えていない。ではどうするか？途中で仕事を変えたくなったらどこかで勉強して、またチャレンジする。学校教育だけで不十分と思えば、塾に行き、水泳を習い、プログラミングの勉強をする。こういったことは既に行われていますね。そういう時代に、ITは本当に便利なツールなのです。ITをフル活用できれば、たとえば過疎地の問題も減るでしょう。小学生にだって中学生にだって大学生にだって、それこそ僕らのような年代の人間にとっても、勉強する手段としてのITが、とても有効なわけなんです。

これからの生き方、社会はどうなるでしょうか？これからずっと、生まれてから死ぬまで、生きていく間は何らかの形で、学びながら過ごすことになるのです。これが、超教育社会。なんでそんな勉強したいの？得するから？そうではないでしょう。われわれは、知りたいのですよ。「分かった」と思うことは、人生の喜びでも最大のもののひとつです。「この人を好きだ」というのもそうですが、「分かった」という感覚を得るためにわたしたちは人間をやっています。ファウストだってそうだった。好奇心のために魂を売ってしまったというのがファウストのテーマです。だから、学ぶということ自体が目的になるのです。そのためのツールとして私たちはITを持っています。IT人材を広げいきましょう。そのために日本は本当は有利な状況にあります。超教育社会とは、生まれてから高齢者まで含めて、みんなが勉強し続けられる社会です。そのための教育インフラが必要です。それをつくっていくことが、超教育協会の本当の役割だろうというのが、会長としての私の意見です。課題先進国の日本として、超教育、そして超教育社会をつくることで世界を引っ張っていきたいと思っています。ぜひ一緒にやりましょう。

来賓挨拶

野田聖子 総務大臣

課題先進国日本だからこそ、最大限のICTの活用を

皆さんこんにちは。ご紹介頂きました野田聖子でございます。今、小宮山先生から様々なお話を聞きまして嬉しく思うとともに、ICTの普及が日本は遅すぎることを改めて感じておりました。これからは人口減少が待たなしで進みます。私はこれを、静かなる・見えざる有事と呼んでいます。今まで日本人が経験したことがないような、大きな負荷がかかっているこの国にとって、唯一課題解決のためのフォースとして立ち向かうことができるのが、ICTなのではないかと思っています。

昨日、日中韓情報通信大臣会合というものを7年ぶりに行いました。中国の苗（びょう）大臣と、韓国の兪（ユ）長官と、非常に仲良く和気あいあいと会合に取り組むことができ、中身の濃い話をさせて頂きました。そこでわかったことは、やはりアジアの国々が抱えている問題は共通で、やはり人口減少と高齢化が、とても深刻な問題です。

世界でも、日本が10年、20年近く先駆けて人口減少と高齢化という課題に直面していきます。その課題を乗り越えるためにICTを最大限活用するチャレンジを始める必要がある、という議論を交わしました。とりわけ中国は人口が多いです。日本は約1億、中国は約14億の人口を抱えています。高齢化をそのままほったらかしにしておくと相当な負荷がかかってしまいます。そういうなかで何ができるのかといったとき、ICTの力を利用して課題解決すべきであることを再認識しました。今、日中韓、それぞれの国が取り組んでいるのが、AI、IoT、それから5Gです。そして、それらをしっかり進めていくための頼みとしてのサイバーセキュリティ。今、総務省ではそれらの技術を「観覧車」に見立てています。しっかりした土台としてのサイバーセキュリティがあった上で、AI、4K、8k、IoT、5Gをしっかりと取り込んでいくことができます。

ICT人材育成は急務

会合でのフリートークで、私から悩みを抱えていると話しました。それは、人材についてです。今の私たちは、先人の不断の努力によるストックを食べて生きています。これから未来、50年後の日本に私たちが何を残すことができるのでしょうか？人口減少などによりどんどん人材が枯渇して行く中で、ましてやICT人材のほとんど育っていない社会で、何を残せるのでしょうか？

2020年には東京オリンピック・パラリンピックが行われます。だいたいどの都市もそうですが、開催の年にあわせてサイバー攻撃のターゲットとなります。切り抜けるためには、防御だけではなく抑止ができる人材であるホワイトハッカーが必要です。そのようなサイバーセキュリティのトップガンと呼ばれる人材がこの国にはいないのです。他国の皆様の力も借りてどうにか2020年を切り抜けていかなければならないのですが、日本ではホワイトハッカーという人材自体さえ、まだまだ認知が広がっていません。

人材については予定外のディスカッションだったため、今後できることについてはまた新たなセッションを設けようということになりました。できれば小学校のうちから国際的な人材交流を行いたいですね。ICTは年齢不問です。大学を出たからといって、良いICT人材とは限りません。今までの日本の常識と違うことをやり遂げていくためには、既存の団体だけではやりきれません。そうした中で、超教育協会が果たすべき役割は当たり前のように大切なことと思っています。

今までの「学問」や「教育」を超える、ICTのポテンシャル

最後に私の息子の話をしたいと思います。私の息子は、右半身麻痺という身体障害と、知的障害と、呼吸器障害の3つの障害を持っています。心臓が弱いので、呼吸器をつけています。でも今、頑張っ
て生きていて、特別支援学校に通っています。知的障害ですから字も書けませんし、数字も書けませ
んし、絵も描けません。7歳ですが、普通の小学生ができることはほとんどできません。言語障害も
あるので、会話もままなりません。

でも唯一彼が大好きなのが、スマートフォンなんです。これが不思議で、知的障害だからよく分から
ないだろうと思っていたのですが、実は親のやっていることを見て、使い方を覚えていたんです。先
日、親の知らぬ間に、息子に、ある技術革新がありました。ついに、私のスマートフォンからインタ
ーネット通販でブラウンの髭剃りを買ってくれたのです。アルコールが入っているので返品不可、と
いう3万円もする代物で、夫もひげが薄いものですから宝の持ち腐れみたいになっています（笑）。

「いやー、こんなことができるようになったんだね」と夫と驚いていた矢先、今月はまたもや思わぬ
ことが起こりました。先日、息子は夫のゴルフの練習に連れてってもらいました。とても楽しかった
ようで、「ゴルフ、ゴルフ」なんて本人もよく言っていたのですが、そんなある日、またインターネ
ット通販でダンボール箱が届きました。箱を開けてみてびっくり。今度は子供用のゴルフ道具が届い
ていたのです。つまりICT機器と一緒にいる限り、障害を持った子供にも、生活の中でさまざまなコ
ントロールができるということがわかったのです。これは一体なんなのだろうと、そんな不思議な毎
日を過ごしています。

この間は、あるゲームを買いました。忙しいのでなかなか触れなかったのですが、箱から出して充電
だけはしていました。10日くらい経った朝、突然、ゲームの音楽が聞こえてきたのです。あれ、な
んだらう？と思うと、左手だけしか動かせない息子が、片手で操作をしてゲームで遊んでいたん
です。これにもとても驚きました。ここまで来ると本当に、ICTの醍醐味というのはあるのではないか
と。今までの「学問」や「教育」ではない何かがあるICTにはあって、そして今までは保護される側だ
った人たちも、何かきっかけで価値をもたらすことができるのではないかなと。ささやかな我が家の
エピソードなんですけど、そんなことを考えました。

このままでは日本は会社でいうところの倒産です。でもまだ私たちには残された力があります。それ
は、何十年も頑張ろうといいながら力を入れてもらえなかったICTです。2020年には5Gが実用化し
ていく中で、しっかりと花咲かせていくことが大切です。ただ技術ではなくてそれをオペレートして
いく人、有能な人たちを今までにない既存の教育の中でしっかり作り上げていくことが、日本の生き
残る唯一の道ではないかなと考えています。ぜひこだわりを捨てて、そして、新しい日本をつくっ
ていただける皆さんであって頂きたいということを最後に申し上げてご挨拶とさせていただきます。

